

# 東亞醫學

第二十號要目

## 投稿規定

讀者各位の投稿を歓迎す。  
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。  
長さは一〇〇〇字以下とす。

○方證相對説の批判について

龍野 一雄

○急性肺水腫を紫圓で救ふ

矢敷 有道

○枸杞は養生の仙藥

石原 保秀

○傷寒論中に現れたる物理療法

大塚 敬節

○漢方醫學とビタミン

大浦 孝秋

○身邊雜記

竹 茹 生

## 辰の年を迎へて

## 東亞醫學叢書の刊行

辰と龍とは異ふなどと云ふ考證はぬきにして、まづ明けまして芽出たう。

さて龍と漢方醫學とは仲々縁が深い。先づ漢方の經方たる傷寒論に、龍骨といふ藥がある。龍と云ふ動物が架空のものであるに拘らず、その骨を使用するとは、けしからぬと云ふ人があるかも知れぬが、龍骨は大古に棲息したマンモスの骨の化石したものだと言はれてゐる。龍と云ふ字の着くものが皆架空のものばかりではない證據に、地龍といふものがある。この地龍はみみづの異名で、天をかける龍に對稱して考へてみると面白い。

また傷寒論に大青龍湯、小青龍湯といふ處方があり、その他龍の字の附く病名や藥を數へあげると、大變な量にのぼる。

今まで地に潜んでゐた龍の如き漢方醫學をして、大いに天かける龍として天下に雄飛せしめたいものだ。辰の年だ。一つ大いにふんばらうではないか。

東亞醫學協會の創立一週年を記念して、目下協合理事の間で記念事業の計畫が進められてゐる。而してその事業の一つとして、東亞醫學叢書の刊行が舉げられてゐる。本叢書は漢方醫學の素養なき方々が

讀んでも、理解出来る様に、平易に漢方の診斷、治療、藥物、鍼灸、導引等に關する解説を主とし、漢方入門者の手引として役立ち、しかも通俗に墮ちな様に努める積りである。詳細は追つて發表の豫定である。

## 日支提携着々と進む

漢方醫學による日支の提携は益々親密の度を加へ蘇州國醫醫院醫務主任醫師葉橘泉氏は別項掲載の如き書翰を某理事の許に寄せて來た、われわれは相互に手をとる合つて、漢方醫學の發展のために努力すると共に、東洋永遠の平和のために、捨石となつて働く覺悟を忘れてはならない。

## 拓大漢方講座本年も開講

同窓生五百有餘を算する拓殖大學漢方醫學講座は本年も亦四月一日より開講の豫定であるが、今後は

## 謹賀新年

皇紀二千六百年一月元旦

## 東亞醫學協會

役員一同

醫師も藥劑師も常識として漢方醫學を知らねばならない時勢となつて來たので、同講座の將來は益々發展の見込である。

# 方證相對説の批判に

ついで

龍野 一雄

拓大の講義に私は方證相對説を二回に亙り批判し、同説が提示された動機と意義、長所と短所とを解明することに努めた。本説は現代の漢方の復活運動と共に先づ取上げられ、その長所の側面を強調され、現代醫學に於てすらこの説に鑑みて反省され、例へば板倉教授の循環機能不全の療法と對する學說の骨子の思想的根據ともなり得たのである。

方證相對説の批判に關する私見

は改めて論文として發表するつもりだが、本説を講座の卒業論文の課題とし講習生諸賢の御意見を求めた所、大部分私の説を纏めて記述された中に、ひとり柴田小三郎氏は別個の立場より論考され、その著眼には參考となるべきものがある。茲に同氏の説を御紹介し併せて愚見を述べ同氏並びに大方の御批判を仰ぎたいと思ふ。柴田氏曰く

「按するに批判とは字の示す如く批は比較研究の意にして判は判決の判と解するが故に、決定的斷定を以て、判決を與ふる意なればなり。只單に相對に對して余の所見を述べれば、藥は治病の素であり病は藥の效果に依りて消散する恰ものとの關係の如きものでありと考へられるにより、從つて相對性なる理論の生ずる所である。此理論に従へば、相接觸して始めて其目的が達せられるものである。相對性に於ては必ず之に空間を保つて居る。之を接觸せしむるは動であり時間である。彈は彈道を作つて的を撃つ。彈は動して空間を走る。是れ動にして、時を要す

る。其空間を連絡を爲さしむる操作を爲すものは即ち射手である。此筆法に依つて按すれば、證は彼にあり方は醫にあり、醫は方證相對の接觸過程の空間に操作するものに外ならないと思考せらる。醫は證あるを知つて方證を按じて病を治す。相對にして相觸つる能はずといへども、方と證との相對する空間時間間隙を無視して方と證とを一視一言に附して方證を解説するを得ざるものなりと解す」

と。普通方證相對説は鍵と錠との關係を以て比喩されてゐるが、柴田氏が射手と標的とにて比喩されたのは新しい試みで興味深いものがある。鍵と錠とは兩者の間に他を代用し難き不可分の適性が要求されてゐて、方と證との相對する關係を説くに當り頗る妙を得てゐるやうである。然し乍らよく考へてみると、鍵といひ錠といひ譬へば極めて所製的に固定化され客觀化されたものである。さう云ふ合鍵が「在る」といふことに於て正しいのは云ふまでもないが、甲の錠を甲の鍵に合ふものと判斷することに對して、何の考慮をも拂はれてゐないのけ缺點である。甲乙丙丁等の鍵の中から甲の錠に合ふものとして撰用するのは鍵自身も發動によるものでないと言ふまでもなく、錠を握つた人の撰擇によるの外はないのである。且又錠を見てその特性を識別するといふことも亦錠を握る人の思想に俟たねばならぬ。して見ると錠と錠との考へを固定された純粹なる客觀的のものとするのは當を得て居ないことが判るであらう。

方證相對に就ても亦全く同様のことが言へるのである。即ち病的現象として顯出せる種々の自覺的他覺的の症狀を一つ残らず數へ上げてその全部を治療の目標に置くには及ばない。數多い中の主要にして治療の對象となすべき症候だけを抽出することが必要である。斯く云ふ（もよ）り手術其の他の治療手段に對してそれら證がある證といふ場合に於てはたゞ症狀の列擧ばかりではなくて必ず某湯といふことが前提されてゐなければならぬ。證は即ち指示を云つたのである。指示といふ言葉によつても明かな如く、指示は症狀そのまゝ、そのものではない、これによつても證と症との本質的な相違を知ることが出来るやう。

證を構成する所の症狀は決して無秩序に集められ羅列された症狀ではなく、その相互の間に聯絡があり矛盾を含まぬものであることを要す。即ち一つの纏りをなしてそれなればならぬ。證のうちでそれだけだけ目標に治療すれば、他は從つて消散するといふが如き主要な目標となるを主證といひ、他を客證といふ。絶對的指示と比較的指示とも云ふことが出来るやう。例へば葛根湯の證として考へられるのは、脈浮數、惡風、頭項強痛であるが、その場合以上の證は互ひに關聯し合ひ、一つの纏まりを成して居てその一を缺くとも葛根湯の證としては成立し難い。

されば以上の證は絶對指示即ち主證といふべきである。若しこの場合軽い咳嗽があるとか、便秘してゐるとか、いふやうな症狀があつても、それ等に對して一つ一つの藥味を擬す必要はない。この場合の軽い咳嗽は外邪によることを物語り、葛根湯の證に對する一つの支持をなすに役立つし、便秘も亦陽證であることの裏書きをする點に於て意義がある。若し太陽陽明合

病の場合でない下痢が存在するとしたら、もはや葛根湯の證ではなからう。枝や葛根湯でも考へべきであらう。仍ち葛根湯の證にとつての軽い咳嗽とか便秘とかは主證ではなく客證であり得る。斯様に考へて來ると、客證といふものは主證を否定する消極的ではなくて、反つて之を支持し消極的に認容せんとするだけの意味しか持たぬものと考へてよいと思ふ。賀屋恭安によれば、主證とは先に現はれ客證とは後に現はれると規定されてゐるけれども、それは先後を以て表現すべきもので、實際に於て主證が後に現はれることもあるのである。偶寒論傷寒の定義に於ける或未發熱の如き場合の發熱も客證でなくては反つて主證である。

方證相對は上述の如き過程に於て成立するが、故に症は客觀的に取扱はれ得るものであつても、證は純粹客觀では構成されず、主觀に媒介されて構成された客觀的思想の産物でなければならぬ。勿論此際主觀だけで證が假空的に構成される譯はない。

かすが故に、たとへば症狀は限り無く出現すとも、證として把握されるものは限り有るを以て、唯證として把握することによつてのみ限り有る方が出来るのである。中西深齋「傷名數解卷四」に對する「方證關係」の關係を第一加減法に於て方と證との關係を第一必ずしも兼治せずして各證を分ち治すもの、第二一二の異同に因り懸に其のゆく所を殊にするもの、第三一方にして其證を二三にするもの、第四證相類似して方相類せざるもの、第五種多くして證

少きもの、第六證多くして藥少きものに分類したが、その分類が單なる機械的形式的に終つてゐるのには惜しい。證の構成をもつと解析出來たなら單に數の多少に關せずその一段奥にあるものを握むことが出来たであらう。

類證鑑別に苦しんだり、誤診を招いたり、甲の醫者と乙の醫者とが意見の相違を來す事のあるのは全方證相對を用定するに主觀が働かかかつてゐる。證の握み方、纏め方の如何によつてさう云ふ將來性を齎すのである。即ち甲の醫者は白虎湯の證なりと判斷し、乙の醫者は承氣湯の證なりと判斷する場合を生ずるが如きはそれである。かゝる際には方に對する證の纏め方を吟味することに於て或程度までは是非の判定が下せるが、極端な場合には甲は陰證なりと認め、乙は陽證なりと認むるが如き全く相反する判斷が下されることさへあつて、單に思惟のみによつてはその當否を決し難い場合もある。

その時には一方の投藥による反應を觀察することによつて初めて判斷の當否が實證せられるべきだが、方證相對説はそこまでは追及せず終つてゐる。投藥といふ實踐は方證相對が正しかつたか誤つてゐたかを確めると同時に、證の把握の當否をも、決する契機となる。これを見ても判るやうに、主觀だけでも方證相對は正しく構成されず、そこに客觀の介入は不可缺である。前にも述べたやうに主觀に媒介されて客觀が規定され、客觀とが並立せずして却つて統一と客觀とが並立せずして却つて統一されて主觀即客觀、客觀即主觀の關係で超越されるといふ事が方證相對にも亦本質的である。

柴田氏によつて提案された射手彈丸的の關係は右の關係を譬へるものとして錠と鍵よりも一層しつくりしてゐるかと思ふ。何故かといふと、標的になるもの「假りに猿とせしやう」はその物體そのまゝの姿では決して標的とはなり難いのである。猿を射たんとする場合、湯然と銃を向けても猿を射つ意味を成さない。問題は猿の何處を狙ふかといふことに實つてある。尻尾を射つてもそれは響かぬ。心臓とか射つことによつて初めて射撃の目的が達せられるのである。さうするとのとして心臓を撰擇し、次にそれを狙ふといふ思惟過程には主觀が働いてゐることを認めねばならぬ。そして、心臓部の唯一のみの標的としての意味を生じて來る。斯くて撰ばれた心臓部の一點は、もはや單に心臓の一部ではなくして猿全體の價值が含まれて來る。つまり一部分が全部なのである。無論心臓の一部を猿から切離してしまへばそれは組織片としての價值しか持たず、この組織片はもはや猿ではなくつてしまふ。さうするこの場合に全體即部分、部分即全體の關係が成立してゐることが知られる。標的は、即ち證に該當するのである。照星そのものも亦單なる機械ではなく、射手の眼の延長でありその意味で射手の器官としての働きをなすものである。照準の性質が方に該當し矢張り主觀と客觀の働きのよつて構成されることは言ふ迄もない。

柴田氏が右の如き意味に於て方證相對を射撃に譬へられたものによつてはたゞ相對といふ言葉の上だけの比喩を銃と的に持つて來たに過ぎないやうだ。それでは折角の著想がたゞ葉を換へたといふに留まつて、眞の價值を生じて來ない。是れ柴田氏が、證の本質を全然解明されてゐないからである。殊にいけないのは彈道を作ると

か時間を因子とするといふ考へ方である。吉益東洞は類聚方や方證相對説に於て時間に關する觀念を抹殺してしまつた。それが方證相對説のむしろ致命的な缺陷である

柴田氏が時の觀念を差披まぬ方證相對説に時の觀念があるが如き比喩をされたのは方證相對説そのもの、咀嚼が不充分だからで、特に彈性的に接觸せしむるに動と時を要すといふが如き比喩は方證相對説にとつては何等の意味をなさない。方證相對説では證が定まる

柴田氏の時間の觀念も東洞の方證相對説に時間の觀念の無きことを指摘する爲めに提出されたものならば頗る實義が大きいけれども彈丸の動きといふことから類推的に捻出されただけならば、決して方證相對説の本質を割つたものとするには出来ぬ。之を要するに柴田氏の提案は比喩として頗る興味あるものとはいへ、それが方證相對説の眞の理解

に基いて考案されたものではなく單に言葉の上の置換に過ぎないことを遺憾とする。同氏の今後の御研究によつて方證相對説が一層深く把握批判されんことを衷心より冀つて止まない次第である。

### 葉橘泉氏より の書翰

大塚先生 先には幣翰について御詠承を蒙り、今又漢方と漢學第六卷第十一號一冊及東亞醫學第十號計十部既に拜受厚く御禮申上げます。生の非才を以て、拙著に對し瀧りに御稱讃を蒙り、東亞醫學誌上に御發表を忝し、先生の御厚情全く報ひるに所なく、たゞ自重自愛魯鈍に鞭打つて先生等の腹尾に附し、努力を致さんのみ、更に小生は日本の文法に暗く貴著等もたゞ中八九を諒解するのみにて中に若干の名詞文法の不明なる部分あり、正に努力して日文を研究し、將來先生等の後に從ひ、智識の交換と相互合作を行ふに便したるに先には國外との交換により大に快慰を感じたが、更に望むらくは御見捨てなく時々御指教を賜はらんことを、尙切望に堪えざるは先生が暇を得て弊國に來遊されることであり、小生も亦機會を得ば貴國に至り、親しく教を受けたらば又貴國の同志にして、弊地に御出の際には御紹介を得て一席の懇談を致したく切望の至りに堪えな

るため、拙著を各方面に送つて交換されたく(漢方と漢學の既刊號全部及漢藥用植物等)先生の乞ひを容れられたい。尙小生には數種類の新式改良の漢藥製劑あり、例へば胆胃消保肺勝室室等の如し(説り見本は御送す)經濟的は困難である。貴處と漢藥製劑所製造の各製藥は小生既に書を送つて見本を申込んだが送つて貰へるかどうか、もし該所に於て支那に賣捌きを望まらば大に歡迎する。或は方法を設け、切實なる合作により、互助の効果を收めても宜い。國醫醫院は省長陳則氏が主となり、小生をして院務を主持せしめ、院の刊行物は大體月末には出版の運びに至るべく實際は寄贈致し、御高覽に供へます。陳省長は漢法を提唱して遺す所なく、正に行政上に漢法の地位を確立せんとしてあるが、惜むらくは南京の維新政府衛生所は洋法にかぶれて居るので、吾人は大に努力争闘中です。望むらくは先生等の御聲援を仰ぎたい。小生の近影一葉御送り致しますから、先生の玉照一葉御惠賜に預り記念としたいと存じます。

小弟 葉橘泉頓首 尙別便にて疝患消の見本を四函御送りしますから患者に御試用下さい。

(六頁より) 黃帝内經は主として、物理療法を論じ、傷寒論は化學療法が骨子である。漢方醫學に於ける物理療法と化學療法とは、大きな二つの流として互に交流し、互に牽制しつつ、現在に至つてある。恰も儒家と道家の二つの流れが支那思想の二大系統である様に、それは黃河と揚子江の様に、目的は同じであつても、夫々の特徴をもつてゐる。

## 東亞醫學協會例會

本協會は漢方醫學の基礎學研討と臨牀應用の妙諦とを併行せしめて、會員相互の研鑽を益々深からしむる目的を以て傷寒論と素問を研討し、更に實際講話を以て漢方醫方の學術の大成を期さんとし既に先月第二回研究講演會を開催せり、今月は引續き第三回講演會を左の通り開催す。

一、傷寒論の研究 — 第三講 — 講師 大塚敬節氏

○學的に臨牀的に傷寒論研究に於て最も力を盡されてゐられる大塚講師のこの講話は恐らく最高のものであらう。(教材は康平傷寒論、小刻傷寒論、宋板にても可なり御持參の事) 一月二十七日六時より七時まで

一、素問の研究 — 第三講 — 講師 矢數有道氏

漢方鍼灸の指導原理として又臨牀的に素問の活用を知る爲には絶好の機會である。素問研究の矢數有道氏の名講を聽かれよ。(教材は素問をお持ちの方は御持參され度し。同日七時五分より八時十分まで)

一、蟲様突起炎の實驗的研究 — 第三講 — 講師 龍野一雄氏

○漢方醫學に於ける蟲様突起炎研究で既に廣く知られてゐる龍野氏の一講は氏の深き經驗と秘法を語られ、先づ蟲様突起炎の漢方療法として完璧のものであらう。(同日八時十五分より九時二十分まで)

日時 昭和十五年一月二十七日(土曜)  
場所 東京市小石川區茗荷谷 於拓殖大學講堂

— (當日會場費三拾錢) —

# 急性肺水腫を紫圓で救ふ

## 矢數有道

曾て「漢方と漢藥」に急性及び慢性腎臓炎に併發する急性肺水腫は、紫圓で救ひ得ることがあることを述べたことがある。最近またその一例に遭遇してよく起死回生の效を収め、紫圓の偉大性を發揮したことがあるので報告する。

患者は四十七歳の男子、二十歳頃から腎臓炎を病み慢性となる。從て平素でも顔色が蒼黒く赤味といふものがない。血壓も百八十乃至百九十は常にあつたといふ。

昨年四月、急性症状を呈して相當の浮腫を來したが、治療によつて浮腫は消退した。しかしまだ下肢の浮腫は全くは除れてゐない。が種々の都合上勤務してゐるといふ。

五月初旬、來院、初診時の症状としては上記の下肢の浮腫以外には時々胸が苦しくなり、咳嗽が出る。尿中の蛋白は勿論相當證明される。

導水茯苓湯を與へたが無効である。大柴胡湯加紫蘇子厚朴に變ずると胸内苦悶や咳嗽が直ちに除れて経過がよいといふ。その後ずつと同方を持続して安心してゐた。

八月頃一夜胸部の苦悶感を訴へると同時に、脈搏が頻數となり、そのまゝ心臓麻痺を起して死ぬかと思はれた程であつたが、數時間後には自然に緩解して、事なきを得たといふ様なこともあつたといふ。この病人の居所が横濱であるため、一ヶ月に一度位の診察しか出來ず、充分な觀察が出來ず、十一月九日の夜半、十二時過ぎ頃、ケタ、マシき電話で呼び起さ

れた。病人が突然と死にそうになつたから、至急に往診を頼むといふ。これからは歸りの電車もなくなるとし、明朝早くではどうかといふと、近所の醫師はもう駄目だといふし、明朝まで生きてゐるかどうかわからないからどうして直ぐに來て欲しいといふ。醫師といふ仕事もまた辛いカナと思つて、患者の家の戸を開けて入ると座敷の中で一塊りの人達が騒いでゐるのを目に付いた。

筆者が座敷へ上ると、人品卑しからぬ下テラ姿の人がドワジといつて席を譲り立ち上つた。それにつづいて二人の看護婦も後に續き歸つてしまつた。その下テラ人は醫師であつたことが、その時わかつたのだが、直ぐに歸つてしまはれたので筆者一人の責任となつてしまつた。

それは扱て置き、病人の容態をみるに、實に危急の狀勢である。タンが喉までからまつてゴロ／＼やつてゐる。顔は白く冷たく眼はやつつて死相を呈してゐる。呼吸は促進して、一分間六十數回である。しかし有難いことに脈は弦洪大で百六十三位、細數とはなつて居らぬ。心下をみると堅く、觸つても痛いらしい、苦しがる。聽診器を當ると兩肺全面に鋭い水泡音をきく。心音は不明瞭である。耳も手も足も厥冷してゐる。鼻の先も冷たい。

先刻までゐた醫師は、腎臓炎から來た肺水腫であるといふ。一時間半の間に四十數本の強心劑を注射して酸素吸入もしてゐるが、全く無効に終つてゐる。

とうしてこんなことになつたのかと問ふと、家人は別段の原由といふものは考へられない、夜中に何所へ起きて途中で倒れてしまつたのであるといふ。たゞ二日ほど前から胸内苦悶と咳嗽は訴へてゐたが、別段氣にもしてゐなかつたそのうち、先生のところへ行つて藥を貰ふと思つてゐたさうである。

急性肺水腫であることは疑ふべくもない。どうも助りそうもない状態である。たゞこの病氣が卒病であること、呼ばば病人が僅かに答へるだけの意識があるといふことだけが治療を施す望みあるやうに思へた。そこでこの藥がうまぐ飲下出來て吐くやうなことがなければ、或は望みがあるかも知れないといつて、紫圓六十粒を與へた。即ち筆者はこれを、胸内の水氣へさ峻下すればよいものと斷定したからである。

有難いことに病人は樂々と丸藥をのんだ。三十分ほど病人の側にゐて様子を見てゐたが、別によい徴候も見えない。呼吸も脈も大差ともしない。家人はタンが喉まで來るともダメだから、なんとか今の内にして貰へまいかといふ。因て更に七十粒を與へる。三十分ほど経過する。變化がない。親類の人達で、先生注射をしないでも大丈夫でせうか、と危ぶむ。強心劑の注射も既に四十本以上やつて駄目なのだから、今更一本や二本私がやつても役に立つまい、それよりも病氣を驅逐することが先決問題である、私は私の考へる治療だけするから、注射をするならやつても構はぬといふと、家人はどうせ注射しても効くわけではないから、する必要はないだらうと思ふといふ。そこで注射はせぬことにしたが、百三十粒の紫圓をのんでも病勢に頓挫の徴候がないので、筆者も、稍々自信を失ひかけて來た。たゞ却て悪くなるといふ様子

もないし、のんだ藥を吐きもしないといふのが嬉しい。そこでどうせ死ぬ病人なら思ひ切つたことをしてやらうと決心し、更に七十粒の紫圓をのませる。そして暫く様子を見ると、喉のゴロ／＼が少くなつたやうである。呼吸數も四十五位となる。これは面白いと考へ、更に残つてゐた六十粒ばかりの紫圓をのませた。

この頃から大分呼吸が暢かになつて來たが、四回目の服藥後十數分ほど経つと、病人は放屁を初めた。それが呼吸する毎にポツポツポツといふ様な具合に六七回出たので、思はず一座の人達が笑つてしまつた。放屁が終ると間もなく病人が實にポツカリと目を開いたのである。眞向ひに坐つてゐた筆の顔を見てニコリと笑つた。その笑ひ顔が未だに忘れられない。このニコリを見て筆者も漸く愁眉を開いた。その後たゞ漸次に快方に向ふ病人を見守つてゐるだけだ、午前六時に歸宅する頃は家人と談笑する位になつた。夕刻往診すると氣分も何も平常の如くであつた。この病人にはその後一週間ほどは毎日三十粒づつ紫圓を頓服せしめ、傍ら大柴胡加蘇子厚朴湯を服せしめた。

十二月初め、この病人の勤務する會社が軍需工場なので、缺勤されるや損害が大きくなるので、缺勤さぬ、といふ會社側からの乞ひで、ぬ、といふ會社側からの乞ひで、出勤出来るかどうかと相談を受けた。絶対に無理をせぬ約束でこれを許した、この病人の會社は東京にあるので、その近所に轉宅せしめ、數日に一度は見廻つて診察してゐる。一日だけ休養しただけで、事なきを得た。

年の明けた今日、この患者が妻君を伴ひ新年の挨拶を診察を受けに來た。血壓も百六十五、血色もよくかつて大元氣である。筆者もこれをみて、死線を突破したあ

### 昭和十四年度

### 拓大漢方醫學講座講義頒布

- 一、傷寒論、金匱要略解説(一一六頁) 大塚敬節
- 二、傷寒論、金匱要略階梯(十五頁) 大塚敬節
- 三、漢方治療各論(一〇五頁) 木村長久
- 四、後世要方解説(三十七頁) 矢數道明
- 五、漢方治療各論(六十六頁) 矢數道明
- 六、漢方醫學總論(八十六頁) 矢數有道
- 七、漢方藥物學講義(七十三頁) 清水藤太郎
- 八、漢方醫史學講義(八十一頁) 龍野一雄
- 九、鍼灸俞穴學、治療學講義(一三三頁) 柳谷素靈
- 十、經驗藥方分量集(十一頁)

右十冊ノ中七、十ヲ除ク以外は全部増補改訂版、全揃金拾圓也にて希望者に頒布す(送料當方負擔)

東京市牛込區新小川町二ノ七(溫知堂内)  
**東亞醫學協會**

電話牛込(34) 二七七二番  
 振替東京一一九、四三〇番

の頃を偲び、つい愉快になつて筆を執つた。  
さてこの一例をみても、腎臓炎から併發した急性肺水腫が、紫圓でなほることがあることを知つて

### 枸杞は養生の仙藥

石原保秀

枸杞は茄科に屬する落葉灌木で天精、地骨、地節、地仙、却老、仙人杖其他の異名がある。和名では酒美久須利(ヌミクスリ)と云ふなどは、茲に繰返す要も無いが、我國では、本州は勿論、四國九州琉球臺灣等の原野や、路傍等に自生する。又庭や生垣等にも植栽されて、葉は之を和物(アヘモノ)として食する外、陰乾にして茶の代用とし、尙其實も根も總て之を藥用として居ること、是れ亦御承知の通りである。

俗諺に、家を去ること千里、蘿摩及枸杞を食ふこと勿れとある。其意は、此二物は精氣を補益し、陰道を強盛にするを言つたものだと言つて居るが、更に續頭に從へば一世に傳ふ、蓬萊縣の南の丘村に枸杞多(中略)、其鄉人に壽考多し、其水土の氣や飲食するが爲なり、又潤州開元寺の傍に枸杞が生ずること幾久し。土人目に枸杞杞并と爲す。其水を飲めば甚だ人を益す」と述べて居るが、此并に就ては、劉禹錫にも左の如き詩がある。

長生療養方及還年要抄には、蓬萊縣のことを述べた後「我國には竹田千繼、飲食湯浴、偏へに枸杞を用ひて壽百二十、春海貞吉之を服して百十九歳」とある。百一か二十かに就ては、マダ調べたことには無いが、兎に角長壽であつたことには間違ひ無いらしい。貞吉はモト唐舞師である。大同中雅樂助に補せられたが、嘗て醫方を受け、常に枸杞を服した。年百十六猶壯容あり、寛平八年丙辰夏歿、とあるが其れだ。

で、春花秋月をも籠居に、看もせぬことの多かりき。されば愁眉を開く由無く、一向針灸藥餌を求め、病苦を忘れんとするのみたりしを、或人一方の良藥を教へ給はりしより、今は三十餘年來、病を忘れて平安なり。抑々其藥といふは、いとやすき一品にて、製するも亦難からず世の人一統に知る枸杞を煎じて常に服せば必ず延壽の妙劑なり僅に服して腹を和らげ、精を益すること神の如し。されば拙子は枸杞の枝葉を一連に刈り、蔭干しにして貯へ置き、焙爐に乾かし、日毎に之を茶の代りとなせしより三四年にして持病を忘れ、五六年にして壯健なること正に還童の氣力を覺え、枸杞にて齡を安らかに、年六十餘歳を保ちたり。生を貪る所爲にはあらねど、病をのがれし嬉しさに世に在る人の親疎を偏せず、此枸杞を服して、補元精盛の功を得せしめ、自然萬病の愁ひを除き、尺壽を保ち給はんことを、普願す拙子が丹誠の老妾心と、普く十方に告げ奉るのみ(下略)」と述べて居る程だから、矢張り相當の效力があるものたることは確らしい。閑窓瑣談は天保十二年の著作だが、彼は他の書籍が風襲の故を以て禁錮の刑に處せられ、手鎖中同十三年水腫を病んで卒したと云ふから、斯かる不慮の事體さへ無かつたらば、尙相當の長命をしたことだらうと思はれる。

### 東亞醫學協會指定

和漢藥專門  
**高島堂藥局**  
東京市本郷區本郷五ノ五  
電話小石川一六五七番  
振替東京二五九三番

和漢藥專門  
牛黃丸  
本舖 **紀伊國屋藥店**  
土田梅吉  
東京市神田區花房町二  
電話下谷五七番  
振替東京三〇八〇五番

和漢藥專門  
**小島七五郎**  
小石川區原町十二

和漢藥專門  
**江州屋藥局**  
藥劑師 吉田一郎  
埼玉縣深谷町本町  
電深谷三一六番  
振替東京八一四五番

和漢藥種問屋  
**植木萬策商店**  
振替東京二八二一一番  
振替大阪五二〇二三番  
振替小樽一四六二番  
神奈川縣二宮區内井之口

滋強劑として有名のことは、既に地仙、却老、仙人杖等の異名が之を證して居るが、本草經に據れば「五内の邪氣、熱中消渴、周痺風濕を掌る。久服すれば筋骨を堅くし、輕身不老、寒暑に耐ふ」と云ひ、名醫別錄に據れば「胸脇の氣、客熱頭痛を下し、内傷大勞喘咳を補ひ、陰を強くし、大小腸を利す」とあり、顏灌に從へば「精氣諸不足を補ひ、顏色を易へ、白を變じ、目を明にし、神を安んじ人をして長壽ならしむ」と云ふ所が後世になつては、苗葉根子共に氣候が異なる以上は、當然其効用も異ならなければならぬと言つて、本綱などには、各其主治を擧げて居るが、要するに、矢張り「精氣を補ひ、陽道を益し、諸熱を去るは勿論、骨蒸や消渴にも効があり、吐血や咯血にもよい」と云ふのである。殊に陶弘景は「葉を糞に作れば少く苦い。されど

貰ひたい。それからその使用量といふことが相當に配慮せねばならぬ問題であることも附言して置きたいと思ふ。(十五・一六)

我國では竹田千繼が特に有名である。按ずるに「千繼は山城愛宕の人、少にして典藥寮の醫生と爲る。嘗て本草を讀み、枸杞老を欲くと云ふに至つて、其效を試みんと欲し、乃ち多く之を植ゑて、春夏は葉を服し、秋冬は根を食し、又荈根を以て酒に浸して之を飲み沐浴亦必ず其の煎汁を用ひ、老に及んで懈らず、年七十を踰えて耳目聰明、顏髮壯時如し。文帝帝弗豫、已に愈えて體羸す。侍臣千繼が却老の狀を奏する者あり帝即ち召し見て、懼でて典藥允を爲し、枸杞を培養して時に之を進めしむ。千繼亦更幹あり、帝之を知りて左馬允に補し、藏人所に直す。貞觀二年卒す、卒する年百有一(皇國名醫傳)と云ふのが其れである。

瑞犬の形とは、仙家の所謂「千載の枸杞は其形犬の如し」を云ふたのだが、尙劉松石の保壽堂方には地仙丹のことがあり、「一老人之を服して壽百餘、行走飛ぶが如し白髮黒に反り、齒落ちて更に生じ陽事強健なり。此藥性平、常に服して常に邪熱を除き、目を明にし身を輕くす」と云ふから、之では或る人などにはどうも禁忌品かも知れぬ。

我國では竹田千繼が特に有名である。按ずるに「千繼は山城愛宕の人、少にして典藥寮の醫生と爲る。嘗て本草を讀み、枸杞老を欲くと云ふに至つて、其效を試みんと欲し、乃ち多く之を植ゑて、春夏は葉を服し、秋冬は根を食し、又荈根を以て酒に浸して之を飲み沐浴亦必ず其の煎汁を用ひ、老に及んで懈らず、年七十を踰えて耳目聰明、顏髮壯時如し。文帝帝弗豫、已に愈えて體羸す。侍臣千繼が却老の狀を奏する者あり帝即ち召し見て、懼でて典藥允を爲し、枸杞を培養して時に之を進めしむ。千繼亦更幹あり、帝之を知りて左馬允に補し、藏人所に直す。貞觀二年卒す、卒する年百有一(皇國名醫傳)と云ふのが其れである。

# 傷寒論中に現れたる 物理療法

## 大塚 敬節

傷寒論の治法は藥物の内服が主であるが、物理療法としては、次の如きものが擧げられてゐる。

- 一、燒針
- 二、溫針
- 三、灸
- 四、熨
- 五、被火
- 六、澀水又は灌水
- 七、刺

燒針と溫針とは同じものであるか、どうか私にはわからない。同じものなら、之を區別して書く必要はないものと思はれるが、殊更に書き分けてあるのを見ると、相違があるのかも知れない。津田利貞氏によると、燒針及溫針の術は前漢創業以後傳はず、これ等の法は三代の聖世に行はれたものであるとしてゐるが、私はいま遽にこれに賛同することは出来ない。しかし燒針及び溫針が可成り古い時代に於て、藥物療法と共に廣く行はれたものであることは疑ふ餘地がない。私は傷寒論に云ふ處の燒針及び溫針が如何なる術式のものであつたかを明にすることは出来ないけれども、その目的は發汗下熱にあつたもので、如くである。而して傷寒論の作者は、藥物療法

の誤治と共に溫針及び燒針による病勢の悪化を擧げてゐるが、如何なる場合に溫針すべきか、燒針すべきかを説いてゐない。しかも、已に發汗し、若しくは吐し、若しくは、若しくは溫針し、仍ほ解せざる者は云々とあつて溫針を汗、吐下と共に併行ふことを説く處を見ると、傷寒論の作者が溫針の効果を認めてゐたことは否定出来ない

事實である。

燒針にて汗をせしめ、その針を刺した處が發赤腫脹した場合は奔豚なる一種の病症を呈するに至るが、かゝる際に、傷寒論の作者はその發赤腫脹の部位に各一壯宛灸を施行し、同時に桂枝加桂湯なる藥方を服用すべしと述べてゐる。即ち此の條文は燒針による病變を灸と藥物療法によつて治すべき場合であつて、私は此の條文から、燒針は身體の一箇所に刺すのではなく數箇所に刺すものであることを知り得たのである。

左に溫針と燒針の出でゐる條文を拾つてみる(枚数は康平本による)。

第十九枚裏  
若し汗を發すれば則ち惡寒甚し溫針を加ふれば、發熱甚し、之を下せば則ち淋甚し。

第二十三枚裏  
太陽病三日、已に發汗し、若しくは吐し、若しくは下し、若しくは溫針し、仍ほ解せざる者は此を壞病となす。

第二十八枚裏  
(上略)若し重ねて汗を發し、復燒針を加へて之を得る者は、回逆湯之を主る。

第五十五枚表  
燒針にて其汗をせしめ、針處を被むり、核起りて赤き者は、必ず奔豚を發す。其核上に灸すること各一壯、桂枝加桂湯を與ふ。

同裏  
火逆之を下し、燒針によつて煩燥する者は桂枝甘草龍骨牡蠣湯之を主る。

第五十六枚表  
太陽の傷寒は、溫針を加ふれば必ず驚す。

第六十七枚裏  
太陽病、醫汗を發し、遂に發熱惡寒す、因つて復之を下し心下痞す、復燒針を加へて因つて胸煩す。(下略)

第八十六枚裏  
(上略)若し汗を發すれば躁し、心憤々反つて譫語す、若し溫針を加ふれば、必ず恍惚して煩燥眼を閉することを得ず。(下略)

第九十六枚裏  
若し已に吐、下、發汗、溫針して、譫語するは柴胡の證罷む、此れを壞病となす。

次に灸であるが、傷寒論の灸は主として少陰病及び厥陰病に於てその適應症が示されてゐて、溫むることを目的としてゐる。即ち、當に其背を溫むべし、之に灸せよと云ひ、手足厥逆の者は之を灸すべしと云ひ、下痢、手足厥冷、脈なき者、之を灸して温まらず云々と云つてゐるのを見て、灸が温むることを目的として用ひられたものであることがわかる。従つて熱甚しきに反つて之に灸する時は咽喉吐血を來し、微數の脈の者に灸する時は、煩逆をなすに至るのである。

傷寒論中に於て灸に言及する處を拾つてみると、次の如くである

第五十四枚裏  
火邪、脈浮熱甚しきに、而も反つて之に灸せば、火に因つて動じ、必ず咽喉吐血す。

第五十五枚表  
微數の脈は憤んで灸すべからず火に因つて邪をなし、則ち煩逆をなす、血、脈中に散じ、火氣微と雖も内攻して力あり、血復し難きなり。

同  
脈浮は汗を以つて解するに宜し火を用ひて之に灸せば、邪從つて出づるなく、火に因つて盛んなり、病、腰より以下、必ず重くして痺す、云々。

第五十五枚裏  
燒針の條下參照。

第一百枚裏  
少陰病、吐利、手足逆冷せず、反つて發熱する者は死せず、脈至らざる者は、少陰に灸すること七壯。

第一百一枚表  
少陰病、下利、脈微瀋、嘔して汗出で、必ず數々更衣す、反つて少き者は當に其背上を溫むべし、之を灸せよ。

第一百六枚裏  
傷寒、脈促、手足厥逆の者は、之に灸すべし。

第一百二十枚表  
下利、手足厥冷、脈なき者、之に灸して温まらず、若脈還らず反つて微喘の者は死す。

次に灸法である。灸法はたゞ一處に見えてゐて、これも發汗の目的で用ひたものである。即ち太陽病二日、反つて燥、反つて背を熨し、大いに汗出で云々とあるが、宋本の細註及び玉函經では反つて加瓦となつてゐるの注目すべきである。即ち瓦を燒きて其背を熨しとなつてゐて、溫石の如くに、瓦を温めて、それで背を熨して發汗を促したものの如くである。

次は被火である。これは火を被むるとわれは讀んでゐるが、實際にはどんな方法が用ひられたか、私にはわからない。而してこの被火も發汗の目的で用ひられたものであることは、次の條文によつて明かである。

第二十枚裏  
(上略)若し火を被むる者は、微しく黃色を發し云々。

第五十三枚裏  
太陽病、中風、火を以つて劫がし

て汗を發し、邪風、火熱を被むり、血氣流溫し、其身必ず黃を發す云々。

傷寒脈浮、醫火を以つて之を迫劫すれば必ず驚狂云々。

同裏  
形、傷寒を作り、其脈、絛緊ならずして弱、弱者は必ず渴し火を被むれば必ず譫語す云々。

同  
太陽病、火を以つて之を重して汗を得ず云々。

第八十一枚裏  
陽明病、火を被むり、額上微しく汗出で云々。

次には水を用ふる場合である。即ち身體に冷水をそそぎかける場合である。傷寒論には、病、陽に在り、應々汗を以つて之を解すべしに灌げば、其熱劫されて、去るを得ず云々とあつて、澀は喉と同じであり、喉は噴であるから、身體の表面に冷水を噴きかけたり、灌ぎかけたりして、下熱を圖つたものであるらしい。

次は刺す場合である。單に刺すと云ふのは、どんな鍼でどんな方法をやつたか、私には不明である。第十五枚の表に、凡そ溫病を治するに五十九穴を刺す可しとあつて、溫病の治法に刺を用ひてゐる。又身の穴は三百六十有五あつて、其三十九穴は之を灸して害あり七十九穴は之を刺して災をなす、并びに體に中るなりとある。次に第二十一枚表に、若し再經を作さんと欲する者には、足の陽明に針し、經をして傳へざらしめば則ち癒ゆ、とあつて、傷寒論の針が現在の鍼術と距離のあることが考へられる。次に第二十六枚表に、桂枝湯を服して、反つて煩の解せざるときに、先づ風池、風府を刺すことが説かれてゐるのは、藥劑で

力及ばぬ處を、刺すことによつて補はんとしたものである。更に第八十八枚の表には、耳の前後が腫れた場合に、之を刺すことを説き、第六十四枚の表から裏にかけては、大椎第一間、肺俞、肝俞期門等の穴名を擧げて、之を刺すべき適應症を示し、第七十三枚の裏にも、大椎、肺俞、肝俞を擧げ、第八十五枚裏にも期門を擧げて、之を刺すべき適應症を規定してゐるが、肺俞、肝俞の字が愈々なつてゐるの面白いことだと思ふ。最後に第一百四枚裏に、少陰病下利、膿血を便する者は刺す可しとあるのは、何處を刺すのか、全く不明であるが、これは如何に解釋すべきであらう。(以下三頁へ)

漢法の藥材は、生藥と稱しながらも、生の野菜を生のみで食べようとした譯には行かず、大多數は習慣として乾かしたり、焼いたり煎じたりして、生藥を殺して用ひられてゐるようであるが、同じ藥草を用ひても、民間療法の方では生のまゝを煎じて用ひる場合が随分に多い。しかしその何れにしても、ビタミンの利用は考へられてゐない。

難しい藥理のことは知らないが、ビタミンの發見は、近代醫學の誇るべき行蹟といつてよいのであるから、古い教のみに固執せず良いものはとつて、その治療範圍を擴大したらいふように思はれる。例へば夜盲症にはV.Aが必要だし脚氣にはBとCが用入だし、タル病にはDを、不妊症にはEを、といふ風に、それらの効果のハッキリしたものは、よろしく生藥の姿で、そのまゝを便宜に用ひる工夫

### 漢法醫學と ヴァイタミン

大浦孝秋

をとれば、皇漢藥をして一層有效ならしめるのではなからうか、この點に就て先輩の御指導を仰ぎたいものである。

次に漢法には、その昔食醫といふものがあつたといふ、その食醫の存在が、漢法醫の間から消へ去つて、別に民間療法家の手へ移つて行くように思はれるが、治病の目的達成には、食養生を第一とすべきではなからうか、食養生を教へたのでは、薬代にならぬといふのであれば、問題は自から別であ

### 身邊雜記

#### 竹茹茹生

大黃は品切れである、甘草のストックはもういくらもありません杏仁も酸棗仁も、もうとつづくに市場から姿を消して補給の望みは絶對にない、來年になると甘草一斤拾圓になるであらう、さうだ現に昨日註文した大黃は八圓五拾錢でやつと搜して貰つた。と大震災直後の様に漢藥界にも種々流言が行はれ、匪語が亂れ飛んだが、どうもこれは嘘ではないらしい。昭和十五年の櫻咲く頃ともなればストックを賣り盡した藥種屋が先づ店を閉め、漢方醫は皆一様に中西深齋先生の様な勉強家にならなければならぬかも知れないのである。晦日そばをかき込んで床に就いたが連日の奔走で疲勞が過度になつて眠れぬ。ところへ電話である。往診である。自動車で直ぐ来てくれといふ、自動車などありはしない、省線の驛へ馳せつけると午前一時半、空には寒い星が一杯ですべり込んで来た電車は船詰めである。喧嘩腰で捻ぢこんでドアに背中を叩かれて、往診袍をよれよれにもまれ、驛へ着く度にブラ

はもう少し我慢するといつて、耐へてゐたところ、幸なる哉翌日自然に口がついて大貫の膿が出で疼痛は去り、熱も下降した。電話で指示し二回目の往診をしたばかりのこと、前通り麥門冬湯を續服せしめた。この頃麥門冬湯を服用してゐる中に、脱肛を起した例があつたので、大逆上氣を引き下げたので氣の下陷を起したものであらうと思はれたが、この薬のためには脱肛膿瘍を起した譯でもなさうである。

ツトフォームへ突き出され、待つてゐた客がお先へ失敬する。まるでボンブの安全弁の様に、入口で出たり這入たりつたりやつと目的地へ着く。患家を辭したの時は三時過ぎ、外にはあの元旦の烈風が既に入り影なき街上を横行してゐた。年頭閑暇を利用しての豫定は總べて誤破算。玄關に張り出した四日迄休診の張り札がうらめしい。

その後妻君の手療治で膏藥の貼り代へだけですつかり口も寒がり殆んど全治した。人間の持つ自然治癒力は實に偉大なものである。以來四月ヶ月振りて往診したのであるが、途中あの病人がどんな様子で居るか非常な興味を持つて訪れた。あの殺風景な土間はすつかり床を上げて綺麗に疊が敷かれ、家中とても陽氣である。これは家が違つたかと思つて表へ戻つて表札を見るると二枚の名札が出てゐる。景氣のよい工場へ勤めてゐる患者の弟が階下を修繕して住んでゐることが後で判つた。

心に掛りつゝ、去年から持越しの往診があつた。本誌八月號の「ある往診」の主人公である。初診以來半年になる、當時とてもこの年を越せるものと思はれたかつたのが、その後の経過はともな順調で不思議な位であつた。彼は「ある往診」を書いて間もない頃果然肛門周囲膿瘍を發して高熱が數日間續き、疼痛のため一睡もしれぬといふ、私はその時托裏消毒飲を與へ、排膿口を作るために外用薬を用ひなが中々口が開かず、寢食を共に廢すること十日も續いたのでもはや詮方なく外科醫に托して切開せんかと思つたが、患者

度これに聞いて始めて判つたのであるが、わしと一しよにやめた別の友達はもうとうに死んださうで氣の毒でたまりませんといふ。私は何がなし患者の更生の姿とその話が、正月に相應しい長閑な快よさを以て見きよ、することが出来た。診察して見るに腹瀉など随分よく、肉付がよくつた。熱は殆んどない、その他の一般状態は總べてよいのであるが、胸部には氣喘枝喘息特有のギーンがある。脈は未だ數してゐる。唯一の苦痛は呼吸困難である。咳嗽は時々起る模様だ。良いには違ひないが全治にはまだ距離がある。私はいろいろと注意を與へた。

### 東亞醫學協會幹部

#### 漢方各大家の合議研究製劑

である故原料の精選と處方の的確は絶對他の追従を許さない

本劑は一時押への局處的藥劑ではなく胃腸の活力を健康と同じ様に恢復させる特點があるあらゆる胃腸藥にも満足しない場合にこの皇醫胃腸藥は最後の良藥としてあすゝめする。

45錠	.50
105錠	1.00
375錠	3.00

社會式株

品製所究研會協學醫亞東

さうですと、彼は嶺山病のあらましを語ってくれた。石灰の工場に働く人夫は中々結核にかゝらぬといふが、その鑛毒は胸部に著いて病的症状は現はすが結核菌に對しては繁殖の自由を與へない特異な力を持つてゐるかも知れない。

誌代納入者

芳名

- 一 金壹圓貳拾錢也
東京 永田 八郎氏
横濱 横澤 賢氏
北海道 澤 次氏
千葉 齋藤 清氏
東京 廣野 貞助氏
本協會補助費
一金拾圓也 東京 高島堂藥局
一金五圓也 東京 小島七五郎殿
本協會寄贈
人間醫學 大阪 人間醫學社
人の日本 東京 神の日本社
國醫砥柱 北京 國醫砥柱社
夏令防疫常識 蘇州 葉橋泉氏



近世内科國藥處方の著、蘇州馬醫科十號葉橋泉氏より拓殖大學漢方講座講師一同に對しそれらに實狀を頂戴し感謝に不堪、誌上を以て御挨拶申上る次第である。

北京西城北溝沿三十號國醫砥柱總社々長楊醫亞氏より鄭重なる賀状を拜受謹んで誌上御挨拶申上る次第である。

人間醫學社主幹、大阪時事新報保健部長大浦孝秋氏より玉稿を頂戴した。人間醫學誌上に於ける日頃の氏の國民保健に對する熱情と赤誠は多くの病者を奮ひ立たしめ光明に導いてゐる。

第三回拓大漢方講座終了者三村智生氏より玉稿及びその著書の寄贈を受けた。氏は骨格矯正術に獨特の工夫を積み、病者の味方となつて奮闘せられてゐる。研究課題陰陽に就ての論文は氏の日頃の研究を發表されたもの、首席の模範論文であつた。

矢數清明氏は本年一月一日、漢方醫學處方解説なる著書を日本漢方醫學會より刊行された。蜀版にて三百頁に近く、氏が數年間に亘つて發表された論文中より特に撰擇して編まれたもので、後世派研究の書物の少き折柄此書の出現は一般の注目を引いてゐる。漢方醫學研究者の必讀書である。(定價參圓)

蘇州國醫々院内陳康孫氏は過般本協會發會の趣旨を讀み大いに共鳴せられ鄭重なる入會申込書を共に次の如き書翰を寄せられた。

貴協會之設立宗旨純正使命偉大康孫現正與友好在江蘇省蘇州城內有國醫々院及藥社之創設正與貴協會旨趣相同推進漢方醫學促成東亞和平希冀獨股康孫本此意旨願加入貴協會會員共同研討茲附奉入會申込書一紙云々

上海吳淞路三六七、野邊清氏より本協會宛鄭重なる恭賀新禧の挨拶を受けた。誌上を以て御返禮申上る次第である。

信濃行

大塚生

窓に頻寄すれば寒し向つ峰眞白に煙りて雪降るらしも
人等去りて汽車ぬも寒し外套に頬をうづめてわれ一人ある
汽車の窓につもれる塵埃を氣にしつゝ拭へど拭へぬわが思ひかも
山肌に残りて消えぬ雪の如く拭へども消えぬわが思ひあり
いのちかけし君が仕事の尊さを君は知りつゝも捨て給ひけり

漢方治療室

(一) 妊娠する毎に墮胎して、胎のそだ、ない者がある。四五回も孕んでも、常に墮胎するものである。こんな婦人には、妊娠の徴候がはつきりすれば、その時から芎藭膠艾湯加黄芩を服用せしめるがよい。又黄芩の代りに蒲黄を加へてもよいが、黄芩の方が勝つてゐる。此等の處方で治を得る場合は必ず瘀血、帶下が原因となつてゐる。若し劇しいものには杜統丸を兼用する。杜統丸は、杜仲、續斷の二味を等分、細末とし、米糊で丸じ、二瓦位宛、日に三度服用する者には、杜統丸だけを長服しても效がある。

(二) 若し妊娠しない前に、下腹に凝結、帶下の候があれば、消石大圓を用ひ、灸を施して見ろがよい。それで妊娠することがある。灸は凡そ八膠、腰眼の邊、腰部がよい。千金方に消石、圓の主治として瘰癧及婦人絶産帶下無子方とあるのが是である。以上は皆瘀血に依る場合で、微毒によるものは、微毒の治法をしなければならぬ。

(三) 妊娠しても分娩の時、皆胎が死んで育たぬものがある。かかる場合にも、瘀血と毒とを分けて治療する。又生れて、一二月或は三四月経て死するものがあるが、これには父母の毒が災してゐるものが多い。凡そ小兒の育たないものは、毒に依ることがあるから、是等の毒によるものは、常に毒を制することが第一である。

(四) 己に墮胎の徴候があれば、輕い時は當歸芍藥散を用ひ、これによくならなければ、芎藭膠艾湯がよい。

故小林秀悦著 大塚敬節校註

長沙瘍方

正價二圓 送料十錢

悪性骨膜炎、腫物、横痃、るいれき、打撲、金傷等々現代的に手術を必須とする疾病を、漢方的に非觀血的に湯藥にて治する法を述べたもの加ふるに大塚先生校註の豪華版である。

發行所 拓大漢方科同志會 東京市京橋區横町不二ビル内 取次販賣所 日本漢方醫學會 振替東京六六七七番

胡元慶著 柳谷聰頌序 山田素參譯

癰疽神秘灸經

全一册野寫版印刷・用紙上質和紙・紙數六十 定價 金壹圓五拾錢 送料 市内六錢地方十錢 餘頁、附圖十八葉

癰疽(腫物)は悪性良性に拘はらず大體手術するものと考へられる現今に本書の如き非手術的に手輕に灸に依つて、治療せしむる法を斯くも明快に説いた書物が、我が鍼灸醫學の古典中に存在する事は誠に喜ばしき限りであり、灸の再認識を叫ばれるのも宜なるかなと思ふ。

本書の如く運用せんか、それは病者の苦痛を救ふはもとより經絡の有機的存在を、如實に體得し術者をして經絡の面白さに雀躍せざるを得ない境地に至らしめるであらう。鍼灸家は云ふも更なり洋醫家と雖も一本を座右に置かれ十四經絡(經穴)の運用を體得されん事を。

發行所 醫道の日本社

振替東京一六三五四一番

昭和十五年度

拓殖大學漢方醫學講座

四月一日より開講

聽講 生募集